

CAT-Cognitive Adaptation Training (認知適応トレーニング) を用いた重度かつ慢性精神疾患患者の地域移行・定着支援の実際

○川田 陽子¹⁾、武用 百子²⁾、森 まどか³⁾、牧野 耕次¹⁾、下通 友美¹⁾、市川 久美子²⁾

1) 滋賀県立大学 人間看護学部、2) 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻、3) ジミー訪問看護ステーション

重度精神障害を有する人々においては、注意・記憶・実行機能などの認知機能障害が、日常生活機能に大きな影響を及ぼすことが知られている。精神保健看護の実践場面では、「説明してもできない」「意欲がないように見える」といった困難が生じやすく、その結果、支援者が代行的に関わらざるを得ない状況も少なくない。こうした課題に対し、認知機能の特性を踏まえ、環境調整を通して生活機能を支援する Cognitive Adaptation Training (以下CAT) は、テキサス大学健康科学センターのVelliganら (2008) によって標準化された看護実践との親和性が高い介入アプローチである。

本ワークショップの目的は、CATの基本的な考え方を看護師が理解し、架空事例を用いた演習を通して、対象者の生活上の困難を認知機能と環境の視点から評価し、具体的な支援方略を検討できるようになることである。

本ワークショップは90分間で構成され、前半ではCATの理論的背景と評価の視点として、実行機能レベルおよび行動タイプ(無気力・脱抑制・混合)について簡潔な講義を行う。後半では、訪問看護や地域生活を想定した架空事例を提示し、参加者がグループで対象者の生活場面における困難を整理し、CAT的視点に基づく環境的支援の方向性を検討する。評価ツールの厳密な使用よりも、看護実践に活かしやすい思考過程の共有を重視する構成とした。架空事例検討では、症状理解に焦点を当てるのではなく、「生活の中で何が起きているか」に注目し、行動の背景にある認知機能特性を踏まえて支援を考える視点を強調した。

本ワークショップは、CATを専門的技法として提示するのではなく、精神保健看護において応用可能な「見方」として位置づけるものである。参加者が、対象者の「できなさ」を努力や意欲の問題として捉えるのではなく、環境調整によって支援する視点を獲

得し、日常実践に活かすことを目指す。なお本ワークショップにおける報告すべき利益相反はない。